

# ジーン・シャープの非暴力行動論

谷口真紀

人間文化学部国際コミュニケーション学科助教

## はじめに

本稿の目的はアメリカの政治学者ジーン・シャープ(1928-)が提唱する非暴力行動論がどのような有用性を持っているかを解明することである。そのため、主にシャープの著作にもとづき、非暴力行動の方法論の基底や特色を検討する。

インドの政治指導者マハトマ・ガンディーの非暴力不服従運動に影響を受けたシャープは、非暴力研究の先駆者の一人である。シャープは非暴力行動を物理的な暴力を用いないで権力と闘争することと定義する。<sup>1</sup> 支配者が頼みにしている被支配者からの協力を断つことで支配者の「アキレス腱」<sup>2</sup>にダメージを与え、権力を揺らがせる抵抗だと規定する。シャープは歴史上の独裁体制の事例分析を徹底して行い、非暴力行動論を導き出した。それは支配者の暴力に暴力で対抗するのではなく、支配者が間接的・直接的に依拠している力を取り扱うことで、やがて支配者から力を奪回することを目指すといった実践的な戦略である。

1993年初出の著書『独裁体制から民主主義へ』<sup>3</sup>はシャープの代表作で、世界各地の民衆の間で読み継がれ、民主化運動の理論的支柱の役割を果たしてきた。2000年のセルビアでの民主化運動「オトポール!」や「アラブの春」のひとつである2011年のエジプトでの反政府デモは、いずれも同書に影響を受けた市民が率いた非暴力運動であった。<sup>4</sup> そうした中で、シャープの非暴力行動の理論は良くも悪くも注目を集めている。一方では、シャープは2009・2012年の2度にわたってノーベル平和賞の候補に挙げられ、民主化運動の理論家として高く評価されてきた。他方では、シャープはアメリカ政府と共謀して海外に親米派の政権樹立を企てていると疑いをかけられ、民主化運動の扇動者として非難されてきた。後者は根拠のない陰謀説であり、そのような嫌疑はシャープの著作が広く読まれていることをかえって裏書きする。

実際、数あるシャープの英文著作はビルマ語やアラビア語をはじめとする欧米以外の言語を含む53言語に翻訳されて普及している。ただ、シャープの非暴力行動論は新聞やテレビのメディアには取りあ

げられるものの、学術研究にいたってはまだまだ十分に組み込まれているとは言えない。世界的に顕著な研究として社会科学者のプライアン・マーティンによる2013年の論文「ジーン・シャープの政治」<sup>5</sup>を挙げることができるまでである。プライアンはシャープの非暴力行動の方法論に当てはまらない複雑なケースを厳しく指摘しながらも、優れた点も見出ししてきた。日本国内ではシャープの知名度はさらに低く、シャープを取りあげた研究自体は文化史学者の中見真理による2009年の論文「ジーン・シャープの戦略的非暴力論」<sup>6</sup>が見当たりのみである。シャープについては非暴力行動の理論的指導者としての側面だけでなく、その理論自体の学術的議論をさらに重ねていく余地があると思われる。

世界各地でテロリズム・虐殺・戦争・ヘイトクライムの犠牲になる人々が絶えない中、膨大な研究から紡ぎ出された冷静なるシャープの非暴力のすすめが今ほど必要なときはない。暴力の連鎖を断ち切るのにもっとも有効なのは暴力に非暴力で対抗することだと、シャープは一貫して訴えてきた。

したがって、本論はシャープが提唱する非暴力行動の核心を明らかにすることを目指している。シャープの方法論がどのようにガンディーの遺産を引き継ぎつつも独自に発展したか、またどのように理論と実践を統合しているかを明らかにし、平和構築研究の一端を担いたい。なお、本文献研究で引用する英文の邦訳はすべて筆者が行った。

## 1 シャープの非暴力行動論の基盤

シャープの非暴力行動の理論はマハトマ・ガンディーの非暴力不服従運動であるサティヤグラハ(Satyagraha)を土台としている。シャープは自らの著作の中でガンディーの言葉をしばしば引用する。のみならず、ガンディーの研究も手掛り、1960年に著書『ガンディーの道徳的力という武器の行使』<sup>7</sup>を発表し、ガンディーの非暴力運動の歴史をていねいに跡づけた。(ちなみに、この本の序文をしたためたのは、シャープの研究を励ました物理学者のアルベルト・アインシュタインである。)

シャープはガンディーのサティヤグラハは人間

存在の「真理の把持」<sup>8</sup>を貫くものだと説明する。シャープの非暴力行動論の根底にはこのガンディーの真理の追求に通底する①積極性、②戦略性、③主体性の3点を見てとることができる。

第1に、ガンディーとシャープの両者は非暴力を積極的な方法と捉えている。非暴力は無暴力とは違う。それは暴力ではない手段を用いて積極的に抑圧や支配に抵抗していく術である。

ガンディー自らが証言しているように、非暴力という言葉はヒンドゥー教や仏教の重要教義のひとつであるアヒンサー (Ahimsa) にもとづいたガンディーの造語<sup>9</sup>であった。非という否定語が含まれているが、否定的で消極的な力を意味するのではなく、肯定的で能動的な力を意味する。<sup>10</sup> ガンディーは次のように非暴力を説明している。

非暴力とは悪者の意志に従順に屈服することではない。それは全精神を独裁者の意志に抗わせることである。我々の存在のこの非暴力の法則に従いながら、自らの名誉・宗教・魂を守り、帝国の崩壊または再生の地盤を築くため、不正義な帝国全体の力に個人が反抗することは可能である。<sup>11</sup>

非暴力運動とは本質的に活発な闘争であり、血なまぐさい武器を用いる武力闘争よりはるかに積極的なものだとガンディーは述べている。<sup>12</sup> ガンディーの唱えた非暴力不服従運動は暴力の虚しさを訴えて抗争をただ避けるのではなく、むしろ積極的に抗争をしかけていくものであった点をあらためて確認しておきたい。

同じように、シャープも非暴力行動とは暴力を使わない何らかの手段によって、積極的に行動を起こし、効果的に権力に抵抗していく方法だと解説している。<sup>13</sup> シャープは次のように非暴力行動を定義づける。

非暴力行動は抵抗・非協力・介入の数多くの特殊な方法を網羅する一般的な用語である。それらの方法すべてにおいて、抵抗者は物理的な暴力を使わずにあることをし、またはあることをするのを拒んで闘争を行う。よって、技術として非暴力行動は消極的なものではない。それは何もしないことではない。行動が非暴力という

ことである。<sup>14</sup>

非暴力行動は支配者の暴力に暴力以外の手段で抵抗する能動的な行動である。後に詳述するように、行動の種類は抵抗・非協力・介入の3つに分類される。

シャープの非暴力についての理解はガンディーの理解と一致している。シャープも非暴力行動を自分や他者を暴力で傷つけることなく社会や国家の支配体制や構造的暴力に対抗していくために民衆が身につけるべき建設的な技術と見なす。

第2に、ガンディーとシャープの両者は非暴力を戦略的な方法と捉えている。支配者に積極的に抵抗するには、どう行動するのかが鍵となる。非暴力を行使するには、どのような目標を設定し、その達成のためにどのように綿密な計画を立てるかを練らねばならない。非暴力行動は暴力を用いない作戦を駆使し、抑圧や支配に抵抗していく技である。

ガンディーは敬虔なヒンドゥー教徒の倫理観や道徳観から非暴力の哲学を唱えていただけではない。柔和な外見の内には強靱な策略を擁していたのだ。それを端的に示すのが、軍事力を用いた防衛が策略にもとづいて訓練されるように、非暴力を用いた抵抗も策略にもとづいて訓練し自分のものにしなければならないというガンディーの考えである。<sup>15</sup> 非暴力行動は学んで身につけるものなのだ。シャープはガンディーのこうした側面について「彼は注意深く状況の事実を調査する。それにもとづいて運動・戦術・作戦をかなり精巧に計画する。」<sup>16</sup> と言いつづけている。この入念で体系的な非暴力行動計画こそがガンディーの最大の遺産だと評価する。<sup>17</sup>

ゆえに、シャープも効果的な非暴力闘争を行ううえで戦略に裏づけられた行動計画が最重要条件のひとつだと表明している。<sup>18</sup> 決して思い付きで非暴力行動を起こしてはならず、行動目標を大所から眺める大戦略、その大戦略を推し進めるための戦略、そしてその戦略を実行するための作戦というように、組織的な方略を準備しておくよう呼びかける。<sup>19</sup>

シャープの戦略重視の姿勢はガンディーの姿勢を踏襲したものを見てよいだろう。周知のとおり、戦略という語は軍事学の専門用語から派生したものである。シャープは周到な準備計画の重要性を強調するためにあえて軍事用語を用い、暴力を伴う軍事力の戦略に対抗するには暴力を伴わない非暴力の戦略が肝心であると述べる。平和の理念や価値を掲げる

だけでは暴力支配に太刀打ちできず、何も変わらないことをシャープは心得ている。だからこそ、大局の展望からの戦略に則り、抑圧支配を切り崩していく構想を示している。

第3に、ガンディーとシャープの両者は非暴力を主体的な方法と捉えている。積極的に、戦略的に支配者に立ち向かうには、被支配者の側に自立が必要である。誰かが自分を支配者から救い出してくれるという依存から抜け出し、支配者から自分を解放しなければならない。非暴力行動とは抑圧や支配との戦いに暴力を使わないで主体的に参加する法である。

自分たちインド人は現今の社会や制度に直接関係を有しているのだと、英国の植民統治下のインドでガンディーは人々に説いた。「したがって、結局のところ、人は自分に値する政府を手に入れているのだと私は信じている。言い換えるなら、自治は自助努力を通してしか実現できない。」<sup>20</sup> と呼びかけた。植民地支配のくびきとともにカースト制度という身分階層の縛りが人々を苦しめていた当時のインドでのこの発言は注目に値する。そうした体制や構造を生み出し、存続させているのは自分たちにも責任の一端があり、取り除くのは自分たちの責務だとガンディーは洞察していたのだ。

同様に、シャープも国家や社会の支配関係について重要な点を突いている。人々が独裁体制からの自由を目指すのであれば、まず自分自身を解放しなければならないという。<sup>21</sup> これこそがシャープの非暴力行動の理論の根幹をなす見識である。シャープは独裁体制がはびこるのは人々がその体制に何らかの協力をし続けているからだと考える。たとえ諦めからであろうと嫌々であろうと脅されていようと、独裁に抵抗しない限り、人々はそれに力を貸し賛同していることになり、支配関係が続いてしまうと見るのである。

抑圧関係がどのように成立しているのかについてのシャープの視点は、ガンディーの視点と同じ鋭さである。抑圧されている人々にしてみればシャープは残酷なことを言っているかもしれない。人々は自ら望んで植民地・身分差別制度・独裁政治のもとに暮らしているわけではなく、むしろそうした体制の被害者である。しかし、それゆえに、シャープは人々が気づいていない、または気づかぬふりをして抑圧の仕組みを理解し、囚われている自分を自主的に解放する第一歩を後押しする。

## 2 シャープの非暴力行動論の特徴

ガンディーが率いた非暴力不服従運動の要素を受け継ぎつつも、シャープは独自の方法論を体系化した。シャープの最大の功績のひとつは「非暴力行動の198の方法」の提示である。シャープは過去の闘争や革命の事例から198個の非暴力行動を抽出し、実際にどのような行為が非暴力行動に含まれるのかを一覧にした。非暴力行動を54個の「抗議・説得」行動、103個の「非協力」行動、41個の「介入」行動の3種に分類する。<sup>22</sup> なお、「非協力」のカテゴリーには16個の「社会的非協力」、49個の「経済的非協力」、38個の「政治的非協力」の内訳を示している。<sup>23</sup>

「抗議・説得」の一例は2000年にセルビアで試みられたような意図的な騒音である。独裁政権がテレビで政権番組を放映する夕刻の時間帯に、各家庭で一斉にフライパンを叩くなどして大きな音を出して放送を聞こえにくくすることにより、人々は政権への抗議の意志を示した。また、「非協力」の一例は1955年にアメリカで試みられたようなバスのボイコットである。人種隔離を行う交通機関を使用せず徒歩で通勤することで、人々は人種差別体制そのものへの協力を拒んだ。さらに、「介入」の一例は1988年にミャンマーで試みられたようなデモ隊と軍隊との間への割り込みである。デモを阻止しようと銃口を向ける軍隊の前に一人が進み出て事態に介入し、毅然たる勇気で軍隊に銃を下ろさせた。方法は異なれども、こうした非暴力行動の目的は支配体制が依っている力の源を断ち切り、体制の力を弱体化させ、最終的に権力を手放させることである。それをどのように実現させるかを説くシャープの方法論の特徴は①実用性、②中立性、③具体性の3つにまとめられる。

第1に、シャープの非暴力行動の理論は実用的である。ガンディーも旺盛な執筆欲で非暴力不服従運動を人々に提唱したが、そのほとんどが機関誌への投稿エッセイで、非暴力運動の理論化には至っていない。他方、シャープは非暴力行動の学術的理論化を成し遂げた。ただ、シャープの著作の主な対象読者は研究者ではなく抑圧されている人々である。その証拠に、シャープの概ねの著作物は学術的裏づけがありながらも難解な語彙を用いず、かつ読みやすく整理されている。

シャープは人が独裁体制によって支配されたり、

減ほされたりしてはならないとの信念を持ち続け、いかにして独裁体制を防ぎ、崩壊させることができるかの問題を政治学者として考え続けてきた。<sup>24</sup> 広範な事例研究から、独裁体制は切り崩せるとの確信に至る。政権が依存している力を取り除けば、権力はバランスを失い、それまでの抑圧のあだが自らに跳ね返り、政権の勢いを弱められることを理論化した。ついにその発見に至った「エウレカな瞬間」どう感じたかとインタビューでかつて問われた際、シャープは「ほっとした」<sup>25</sup> と答えている。ここに謙虚なシャープの姿勢が垣間見える。虐げられている人々が自らを解放できるようにとの一念で、シャープは非暴力行動の方法論を指南している。

ただし、大多数が差別や抑圧に置かれているような地域では人々に自分たちの状況を把握させ危機意識や非暴力への共感を喚起させるのは容易ではないと、中見真理はシャープの方法論に懸念を示す。<sup>26</sup> もっともな見解であるが、これに関してはシャープも対抗措置を講じている。シャープは1983年に米国で非営利組織のアルベルト・アインシュタイン研究所を設立した。(自らの研究を応援してくれたアインシュタインへの敬意を込めてその名を用いている。) 同研究所は非暴力行動の研究を世界規模で進め、非暴力行動を戦略的に行使する指針を広めることを目指す。世界のさまざまな地域の人々にシャープの方法論を普及させるため、35言語でシャープの著作を翻訳し、そのほとんどを同研究所のホームページ上に無料で公開し、ダウンロードを可能にしている。こうした措置は人々が暴力や圧政に苦しむ状況下でもシャープの著作を入手できるようにするための配慮である。

シャープとアインシュタイン研究所は研究成果を学会で披露するためというより、民衆に伝えるために非暴力行動論を発信する。その方法論は実際に抑圧のもとで苦悶する人々を想定して練られている。

第2に、シャープの非暴力行動の理論は中立的である。支配に苦悩する人々の手引きとして、非暴力行動の土台づくり、非暴力行動の遂行、非暴力行動の停滞の突破口、非暴力行動の成功と失敗など、段階別に詳細に解説してある。その前提としてシャープが顧慮しているのは、特定の社会や国の人々だけに有効な理論は提示しないという点である。対して、ガンディーはインド国民会議の政党の指導者としての政治立場を明確にしたうえで非暴力不服従を

掲げていた。シャープは自身の政治的中立性を確保して非暴力行動論を唱える。

立場や意見に偏りのない非暴力行動論を意図していることを、シャープ自ら次のように表明している。

必要に迫られて、そして意図的な選択で、本書の焦点は独裁政権をどのように崩壊させるのか、新たな独裁政権の出現をどのように防ぐのかについての一般的な問題に置かれる。私には特定の国について詳細な分析や処方箋を示す能力はない。けれども、このような一般的な分析が現在独裁支配の現実に残念ながら直面している多くの国の人々に役立てられればと願っている。<sup>27</sup>

当然のことながら、どの地域にも特有の歴史的・地理的・政治的・宗教的・文化的経験や価値観がある。しかし、シャープが目指しているのは、そうした立場にも加担せず、あくまで普遍性のある包括的な方法論の構築である。

このように中立を明言しているにもかかわらず、シャープの政治的偏りを批判する声が絶えない。例えば、2007年にベネズエラの大統領ウゴ・チャベスはシャープを名指ししてベネズエラでクーデターを扇動するイデオログだと警戒した。<sup>28</sup> しかし、シャープはチャベス大統領に書簡を送って事実の訂正を要求したばかりか、自らの2003年の著書『反クーデター』<sup>29</sup> を贈呈した。<sup>30</sup> この本は一般市民が集結して非暴力でクーデターを防止していく方法を説いたもので、シャープは機知に富んだ対応を見せている。相手がどのような政治的立場の間人であっても態度を硬化させず応じることができるのは、シャープがどのイデオロギーにも傾倒していないことの裏付けを与える。

シャープは誰もが利用できるように政治的・宗教的に偏向のない理論を前提としている。何らかの立場から説くと、違う立場の人々の偏見や猜疑心を誘い、人々がシャープの方法論を手にするチャンスを遠ざけてしてしまいかねない。独裁や抑圧に置かれた特殊な状況にある人々が自分たちの状況下に引き寄せて活用できるように、広くあてはまる理論を展開する。

第3に、シャープの非暴力行動の理論は具体的である。抑圧に苦しむ人々の実用に即し、中立の視点

からさまざまな立場の人々に方法論を呈そうとすれば、それは抽象的でありえない。その点に関して言えば、ヒンドゥー教の神への信仰を拠り所にしてきたガンディーの非暴力不服従運動には多少観念的で漠然たる部分が見受けられた。特に晩年にさしかかるにつれて、ガンディーは神の示す真理に従うことを強調し、神の名のもとにサティヤグラハを行うよう説いた。ひるがえって、シャープの議論には宗教的な言及はほぼ見られない。

というのも、シャープの力点はあくまでも実践的な手法にあって、非暴力の価値や意義を説くこと自体ではないからである。「非暴力行動は実践者に敵対者を『愛する』ことや敵対者を転向させるよう努めることを要求しない。実際、そうしたことはこの種の闘争の独自の特徴なのである。」<sup>31</sup> という記述は、シャープの姿勢を判然と示す。シャープは非暴力の理念をないがしろにしているわけではない。その理念は平和主義を掲げることによって実現されるのではなく、非暴力行動の技術によって実現されると考えているのである。<sup>32</sup> シャープは非暴力をめぐる宗教的または道義的な説教ではなく、合理的で客観的な行動の手法を提示することに重きを置いている。

だが、シャープが示す非暴力行動のモデルには現実に即さないものもあると、ブライアン・マーティンは批判する。マーティンによると、シャープが得意とする支配者対被支配者の構図では資本主義構造・家父長制・官僚政治などでの複雑な力関係を説明しきれない。確かに、シャープの理論はすべての抑圧・差別・支配状況での力関係を網羅できていない。けれども、それはシャープが独裁体制という特定の力関係に焦点を当てていることの裏返しでもある。

どの方法論も万能ではなく個別の状況に特化したひとつの手法にすぎないことはあらためて指摘するまでもなからう。シャープの方法論も独裁支配に抗するという明確なターゲットを持っている。観念的であることを避け、実践に適うよう考え抜かれたものである。

### 3 シャープの非暴力行動論の可能性

以上のようなシャープの非暴力行動の理論が及ぼす影響をめぐり、少なくとも3つの疑問が生じる。1つ目は果たして非暴力を行使する道義性は明示しなくてもよいのかということである。2つ目は独裁

政権を崩壊させた後の社会はかえって混乱をきたさないのかということである。3つ目は支配者側が非暴力行動のマニュアルを手に入れば元も子もないのではないかということである。非暴力の方法論だけではそれが悪用される恐れがあり、社会が非暴力行動の成功を維持できるとは限らず、非暴力行動の手の内が独裁者に知れると有効性が損なわれるといった懸念を忽せにできない。

こうした危惧が残る中、シャープの非暴力行動論にはどのような有用性があるのだろうか。本稿の最重要課題は上記の疑問を踏まえたうえで、この問いへの答えを導き出すことである。次の図1「ジーン・シャープの非暴力行動論の可能性」に示したように、シャープの非暴力行動の理論は①発想の転換、②過程の重視、③工夫の余地の3点で示唆に富んでいる。

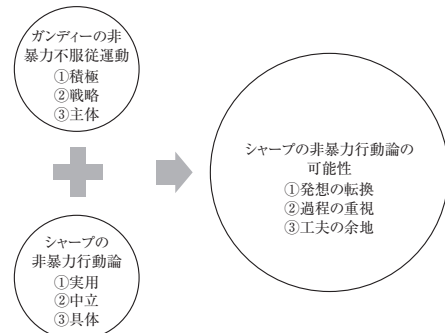


図1 ジーン・シャープの非暴力行動論の可能性  
©2016 Maki Taniguchi

まず、シャープの非暴力行動の理論は平和の価値を説くことにのみならず非暴力の方法を実行することで平和を構築するという発想の転換をもたらす。シャープは全面的に平和の哲学を打ち出すことはない。しかし、それは平和に価値を置いていないからではなく、むしろ深く平和を希求するからこそその戦術なのである。実際の行動によって戦略的に平和を実現していこうとする点に、新たな平和構築の可能性が認められる。

シャープの著作には滔々と平和の重要性を語るメッセージは含まれない。非暴力行動の理論が段階を追ってただ淡々と記される。一見すると、冷静すぎる記述に思われる。机上で独裁政権を打倒するまでの政治力学を論じることに関心があるだけではな

いかとの疑義を抱きそうになるくらいの冷淡さである。しかし、シャープはあえて平和の理念に終始しない。

なぜなら、平和は誰かから与えてもらうものではなく、自分自身の行動によって積極的に創り出すものだという信念が、シャープの非暴力行動論の出発点だからである。シャープ自身の言葉で言い換えるならば、自由は支配者が臣下に「与える」ものではなく、社会と政府の間での相互作用の中で獲得される。<sup>33</sup> 平和は祈りだけでは達成できず、平和の尊さを高唱するのみでは聞き届けられない。それゆえにこそ、今なお紛争や抑圧が続いている。その現状を打開するには、暴力に虐げられている人が自身の手によって暴力の連鎖を断ち切り、自らを解放する勇気が必要だとシャープは考える。民衆が暴力の支配者に協力を拒み、支配者に不都合を生じさせ、そこから支配者が暴力的態度を変えざるを得ない状況に持ち込むことがシャープの狙いなのである。

無論、平和の実現という究極の目標が抜け落ちていけば非暴力行動は単なるパワーゲームの一部にすぎなくなる。個人と社会が暴力的支配から自らを解放して平和を実現するという最終目標に沿う非暴力行動であることを、シャープはもっと強調してもよいだろう。

歴史的・思想的土壌を鑑みても、とりわけ日本では多くの人々が平和運動や平和教育という言葉の背後に政治的右派・左派または宗教的教派を警戒することが少なくない。また、平和の必要性は是認されていても、その方法論となると戦争反対の道徳や倫理を説くにとどまり、具体的な研究の積みあがが乏しい。暴力に非暴力で対抗する方法を提示するシャープの平和論は、政治・宗教の中立を保ちつつ実行に移せる。このように戦略的な平和研究が日本にも必要であろう。

次に、シャープの非暴力行動の理論は準備から最終的に成功を収めるまでのすべての段階で個人の自由に対する意識を高め、民主主義を作りあげて維持する力を鍛える過程となりうる。その意味では、非暴力行動にゴールはない。人々が主体的に、不断に非暴力行動に訴えることによって持続可能な自由な社会を実現していこうとする点に、新たな平和構築の可能性が認められる。

もっとも懸念されるのは、非暴力行動によって独裁政権を倒したその後のことである。非暴力革命に

よって民主主義がひとまず達成されるのはよいが、独裁体制を破壊するだけで、以後は民主主義を維持できずに、再び社会が転覆をくり返すという最悪のシナリオも想定できる。非暴力行動を通して成就した自由の持続可能性には常に不安がつきまとう。そうした事態を防ぐために、シャープは非暴力行動のひとつひとつの過程で慎重に検討を重ねよう呼びかけている。そうした具体的なプロセスが独裁政権打倒後の社会づくりに活かされる。

シャープが導く非暴力行動は個人が自らを抑圧から解き放つ能力の育成の過程そのものである。シャープによると、そうした中で人々は劣等や従属の立場に抵抗し、自尊心を向上させるだけでなく、自己認識や行動での変化が現状の支配集団にも影響を与え、かつ長期的にも影響を及ぼす。<sup>34</sup> このように主体的な非暴力行動に関してここで想起されるのは、政治学者の丸山真男の「自由は置き物のようにそこにあるのではなく、現実の行使によってだけ守られる、いいかえれば日々自由になろうとすることによって、はじめて自由でありうるということなのです(傍点原文)」<sup>35</sup> という認識である。民主主義は既存の状態としてあるのではなく、人々の参加でつくりあげられていくと丸山は考えていた。丸山の言う人々が自ら自由になろうとする過程は、シャープの言う人々が自らを解放する非暴力行動の過程と重なり合う。支配者にも被支配者にも固有に備わっている力はない。人が自由を生み出そうとする中で、ようやく自由は獲得されていく。外部からの能力強化ではなく、個人が自らの内側に働きかけて得られた能力強化は、長きにわたって保持されるはずである。

独裁政権を倒すことだけが目標になってしまうと、打倒後にかえって激しい混乱や暴動が引き起こされてしまう恐れがある。独裁体制の崩壊の先行きについて、シャープはもう少し詳細に説明する必要があるだろう。

第二次世界大戦後の日本の民主主義の制度はひな形をアメリカから与えられた格好で、民主主義はそこに「ある」ものだった。自分たちの行動を通して制度をつくりあげてきたという実感が希薄になりがちである。殊に日本では、民主主義は自ら行動「する」ことで築いていくものだという見識に立脚するシャープの理論に学ぶことは多い。

最後に、シャープの非暴力行動の理論は支配者にも公開することで、支配者層からも反体制への方向

転換を募り、非暴力行動に巻き込んでいく工夫の為所がある。シャープの著作がインターネット上に公開されており、無料で入手できる時点で、被支配者だけに向けた秘伝ではあり得えない。どの立場に置かれている人にも理論の門戸を開き実用的な情報を提供している点に、新たな平和構築の可能性が認められる。

だが、誰でもシャープの理論を入手し実践できるということは、支配者側の人間もシャープの理論を研究し尽くして被支配者の抵抗を効果的に掌握してしまう危険がある。そうであるならば、非暴力行動が甚大な犠牲者を出す事態になりかねない。それでも、シャープはリスクを覚悟で自らの方法論を公然と唱える。なぜなら、そのリスクは支配者側の人々が被支配者側へ立場を転換する機会と表裏一体だからである。

シャープの非暴力行動論の目的は抑圧者の力のバランスを崩すことに収斂する。そのためには被抑圧者だけが抑圧者に対抗するよりも、抑圧者側から立場を転換する人を増やして内部のバランスを崩すのが効果的だとシャープは画策を用いる。このような鞍替えについて、次のように述べている。

したがって、立場の転換を達成するために行使される非暴力行動の目的は被支配者の集団を単に解放するのではなく、自らの制度や政策に囚われていると思われる支配者を自由にするものである。支配者側の人々の立場の転換を提唱する者は、多くの場合、「悪人」から「悪」を切り離し、「悪人」を救い出す間に「悪」を取り除くことを目指す。<sup>36</sup>

支配者側の人々は支配の理不尽さに目覚めることで支配から解放される。さらに、それまでの立場を放棄して被支配者側にまわることで、協力者を失った支配者側が大きなダメージを受け、非暴力行動は一気に勢いを増す。

シャープの非暴力行動の体系が抑圧者に悪用されて、被抑圧者の側から多大なる死傷者を出すことがあってはならない。抑圧者側の人間に抑圧のしくみを突きつけ、自分たちの不安定さと不合理さを理解させるよう、シャープはいつそう試みる必要があるだろう。

シャープの非暴力行動の理論の伝播には、人と社

会とのつながりを促進するSNS(ソーシャル・ネットワークワーキング)が、日本も含めた国や地域を超えて、今後ますます多様な役割を果たしていくに違いない。何より、それを可能にするゆえんは中立的なシャープの方法論がもとよりすべての人に開かれているからにほかならない。

## むすびに

こうしてみると、シャープの非暴力行動論は暴力に訴えないで紛争を治めるために誰もが手にできる賢明な選択肢のひとつである。シャープの理論の有用性は人々が自ら主導権を握って暴力以外の方法で建設的に争いを解決し、暴力の連鎖を断ち切ろうとする過程を重んじる点にある。

繰り返されるテロリズムを前に暴力には暴力で応えるしかない追い詰められている人々に向けて、平和構築は反戦や反軍事を唱えるだけでは実現できないとシャープは説く。平和を戦略的に生み出すシャープの方法論は、平和構築研究に重要な示唆を与えてくれる。

今後は非暴力行動の事例をさらに検証し、シャープの方法論の課題をいつそう掘り下げていくことが求められる。そのうえで、シャープの非暴力行動論の研究を深化させていかねばならない。

## 注

- 1 Gene, Sharp. *How Nonviolent Struggle Works*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2013, 18.
- 2 Gene, Sharp. *From Dictatorship to Democracy*. London: Serpent's Tail, 2012, 41.
- 3 Gene, Sharp. *From Dictatorship to Democracy*. London: Serpent's Tail, 2012.
- 4 Ruaridh, Arrow. *How to Start a Revolution*. Massachusetts: The Media Education Foundation, 2011.
- 5 Brian, Martin. "The Politics of Gene Sharp." Publication on Peace, War and Nonviolence. 2013. Web. September 14, 2016. <<http://www.bmartin.cc/pubs/13gm.html>>.
- 6 中見真理「ジーン・シャープの戦略的非暴力論」『清泉女子大学紀要』第57号、2009年、163-84頁。
- 7 Gene, Sharp. *Gandhi Wields the Weapon of Moral Power*. Ahmedabad: The Navajivan Trust, 1960.

- 8 同前、4頁。
- 9 Gandhi, Mohandas, Karamchand. *Non-violence in Peace and War Vol.I*. Ahmedabad: Navajivan Publishing House, 1948, 121.
- 10 同前、121-2頁。
- 11 同前、4頁。
- 12 同前、113頁。
- 13 Gene, Sharp. *How Nonviolent Struggle Works*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2013, 18.
- 14 同前、18頁。
- 15 Gandhi, Mohandas, Karamchand. *Non-violence in Peace and War Vol.I*. Ahmedabad: Navajivan Publishing House, 1948, 7.
- 16 Gene, Sharp. *Gandhi Wields the Weapon of Moral Power*. Ahmedabad: The Navajivan Trust, 1960, 4.
- 17 同前、8頁。
- 18 Gene, Sharp. *How Nonviolent Struggle Works*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2013, 71.
- 19 同前、65頁。
- 20 Gandhi, Mohandas, Karamchand. *Non-violence in Peace and War Vol.I*. Ahmedabad: Navajivan Publishing House, 1948, 39.
- 21 Gene, Sharp. *From Dictatorship to Democracy*. London: Serpent's Tail, 2012, 13.
- 22 Gene, Sharp. *How Nonviolent Struggle Works*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2013, 25-46.
- 23 同上。
- 24 Gene, Sharp. *From Dictatorship to Democracy*. London: Serpent's Tail, 2012, xviii.
- 25 Ruaridh, Arrow. *How to Start a Revolution*. Massachusetts: The Media Education Foundation, 2011.
- 26 中見真理「ジーン・シャープの戦略的非暴力論」『清泉女子大学紀要』第57号、2009年、177頁。
- 27 Gene, Sharp. *From Dictatorship to Democracy*. London: Serpent's Tail, 2012, xxi.
- 28 Stephen, Zunes. “Sharp Attack Unwarranted.” *Foreign Policy in Focus*. 2008. Web. 14 Sep. 2016. <[http://fpif.org/sharp\\_attack\\_unwarranted/](http://fpif.org/sharp_attack_unwarranted/)>.
- 29 Gene, Sharp & Bruce, Jenkins. *The Anti-Coup*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2003.
- 30 Stephen, Zunes. “Sharp Attack Unwarranted.” *Foreign Policy in Focus*. 2008. Web. 14 Sep 2016. <[http://fpif.org/sharp\\_attack\\_unwarranted/](http://fpif.org/sharp_attack_unwarranted/)>.
- 31 Gene, Sharp. *How Nonviolent Struggle Works*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2013, 107.
- 32 同前、101頁。
- 33 Gene, Sharp. *How Nonviolent Struggle Works*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2013, 14.
- 34 同前、136頁。
- 35 丸山真男『日本の思想』岩波書店、1961年、172頁。
- 36 Gene, Sharp. *How Nonviolent Struggle Works*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2013, 121.

#### 参考文献

- Arrow, Ruaridh. *How to Start a Revolution*. Massachusetts: The Media Education Foundation, 2011.
- Karamchand, Mohandas, Gandhi. *Non-violence in Peace and War Vol.I*. Ahmedabad: Navajivan Publishing House, 1948.
- Martin, Brian. “The Politics of Gene Sharp.” *Publication on Peace, War and Nonviolence*. 2013. Web. September 14, 2016. <<http://www.bmartin.cc/pubs/13gm.html>>.
- Sharp, Gene & Jenkins, Bruce. *The Anti-Coup*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2003.
- Sharp, Gene. *Gandhi Wields the Weapon of Moral Power*. Ahmedabad: The Navajivan Trust, 1960.
- \_\_\_\_\_. *From Dictatorship to Democracy*. London: Serpent's Tail, 2012.
- \_\_\_\_\_. *How Nonviolent Struggle Works*. Massachusetts: The Albert Einstein Institution, 2013.
- Zunes, Stephen. “Sharp Attack Unwarranted.” *Foreign Policy in Focus*. 2008. Web. 14 Sep. 2016. <[http://fpif.org/sharp\\_attack\\_unwarranted/](http://fpif.org/sharp_attack_unwarranted/)>.
- 中見真理「ジーン・シャープの戦略的非暴力論」『清泉女子大学紀要』第57号、2009年、163-84頁。
- 丸山真男『日本の思想』岩波書店、1961年。